

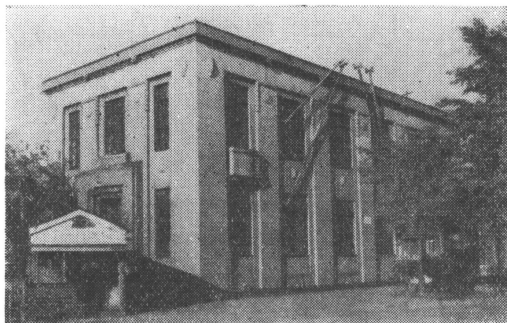
地方だより

測器課検定室 (気象庁測器課 検定 風洞係)

ここでは、気象観測の精度の統一のために測器の検定が行われています。気象業務法によって、正式の観測所で使用する主な気象測器は、気象庁の検定の終了した測器を使うことに定められています。本庁の年間の検定件数約2万点、検定手数料にすると約500万円位になります。また本庁では、ラジオゾンデの検定は、高層課検定係、日射計は、測候課日射係、海洋関係のビューレット、比重計などは、海洋課化学係、地震計は地震課で、それぞれ検定を分担しています。

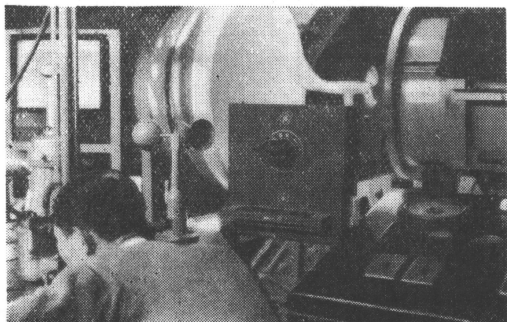
以前は検定をやっていたのは、東京だけでしたが、現在では各管区気象台や海洋気象台でも気象業務法による検定を行っています。

気象台で検定をはじめた歴史は古く、明治29年からその頃は、検定室の、旧本丸内にあったそうで、名人気質の製作者が、不合格になった器械を、お濠の中へなげ



第1図

込んだという伝説を先輩から聞いたことがあります。昭和8年文部省あとの第1図写真に示す現在の建物に入り(ストーブの煙突の斜めになっているのは屋上では日射計の検定をしているので、煙が邪魔にならないようにしたためです)昭和15年の雷災にも(この時には、大手町にあった大蔵省の建物に落雷のため火災がおきて、このあたりの官庁街が焼失した)又昭和20年の戦災にも、すぐ隣の気象台庁舎は焼けたが、罹災をまぬかれて、現在の測器課検定係の室となっています。



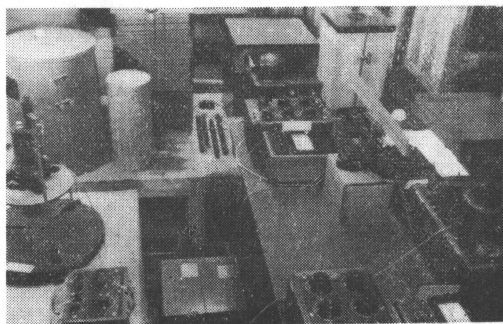
第2図

第2図の写真に示す風洞は、昭和19年に完成し、これも幸いに戦災をまぬかれ、吹出口直径1m、最大風速75m/sのゲッチンゲン型風洞で、それまで自然風でやっていた風速計類の検定方法に一紀元を画し、検定精度、能率の向上、風速計類の改良や研究に大きな貢献をしています。先般I. G. Y西太平洋会議に出席した外国のある学者が、この風洞を見て、日本の気象台独自で、これだけの設備をもっているのに驚いたそうですが、当時の関係者の慧眼に敬意を表する次第です。

検定中の多くの新しい器械類を見て、たまたまやって来られる地方の方が、地方では、古い器械ばかりで、なかなか新しい器械は廻って来ないが、これらの器械は、気象庁で全部購入するのかとよく聞かれるが、検定終了の測器の7~8割は、部外の観測網へ行くようです。新しいガラスの温度計だけでも、月平均1,000本近く検定が終了しますが、これら全部が気象関係に用いられないとしても相当数のものが、国内で、余り横の連絡もとられず独自に、それぞれの目的による観測に用いられているようですが、これらが統一編成され、適切に運用されたら、費用の節約もさることながら、予報や解析にもずいぶん役立つのではないかと思います。

十年一日のごとき気象測器も、おくれればながら新型化しつつあり、検定箇所も増加し、これまでの検定設備も老朽化して来ましたので、関係者の努力により本年度予算がとれて、検定精度や能率の向上のために近い中に新しい検定装置が入ることになっています。

天気予報などは縁遠い、いわゆる縁の下の方的の仕事をしている自分達ですが、近ごろ各方面で設備のオートメーション化が叫ばれ、それに関連した計測方面は飛躍的發展を示していますが、気象界でも、観測の自動化、そして測器検定の自動化が自分達ののぞみです。気象測器も、この辺でふみ切って面目を一新すべき時ではないでしょうか。



第3図

第3図の写真は、今年整備された白金抵抗温度計です。これまで温度計の検定の準器としては、ドイツから輸入した水銀温度計(これを検定では御神体と呼んだ人もありました)を用いていましたが、このたび国際度量衡委員会の決議に準拠して作られたものです。

(写真 五十嵐崇, 文 秋山泰三)